

# 推薦入試合格者への入学前学習に関する教育的実践 (5)

—社会心理学での学習支援—

久保田愛子

宇都宮大学共同教育学部教育実践紀要 第7号 別刷

2020年8月31日



# 推薦入試合格者への入学前学習に関する教育的実践 (5)<sup>†</sup> —社会心理学での学習支援—

久保田愛子\*

宇都宮大学共同教育学部\*

本稿では、第一報で示した宇都宮大学共同教育学部教育心理分野の推薦合格者に対する入学前学習の中で、社会心理学領域に関わる新書課題の学習支援の実践をまとめたものである。社会心理学領域では、合格者が、書籍を通して協力に関わる行動の仕組みを学ぶ中で、教育者の立場から今後の学校教育において配慮が必要と考えられる点について考えを深めることができた。

キーワード：学校教育，社会心理学，入学前学習

## 1. 合格者に意識してもらいたい社会心理学の観点

### (1) 社会心理学領域における専門性

社会心理学領域の入学前学習の追究にあたり、まず確認すべきは、社会心理学がいかなる特徴を有した学問領域であるかという点であろう。社会心理学は、対人関係や集団での行動の仕組みの解明といったテーマはもちろん、推論・判断・感情といった個人のレベルに関わる現象も含めて、それが「社会的」すなわち、人や社会に関連する現象であれば全て学問の範疇に入る。たとえば唐沢(2014) [1] は、社会心理学を、ミクロなレベルとして位置づけられる社会的な場面で喚起される認知や感情などの内的な反応から、対人場面、集団場面、そして文化というマクロなレベルに及ぶ、様々なレベルで定義される変数間の関係を同定し、それをもとに社会的な行動を理解・説明しようとする学問と定義している。実際、本学における社会心理学関連の授業においても、ミクロからマクロなレベルに至るまで、対人関係や社会に関わる広範なテーマを扱っている(久保田, 2019) [2]。

だが、本学で学習できる他の心理学領域の性質を

考慮にいれると、社会心理学領域の特徴的なテーマとして学習すべきは、集団での行動の仕組みであるといえる。第一報に示されているように(川原・石川・宮代・久保田, 印刷中) [3], 本学の入学前学習においては、社会心理学以外に、臨床心理学, 発達心理学, 学習心理学という専門領域を学習することができる。学習者は、この4つの領域を学習する中で、心理学の各領域に対するイメージを構築していくこととなる。そのため、初学者の入学前学習においては、社会心理学領域に特徴的なテーマを扱うことが各領域のイメージを構築する上で重要と考えられる。4領域の中で考えると社会心理学の特徴的なテーマは、集団での行動の仕組みの解明、すなわち相対的にマクロなレベルに関わるテーマと考えられる。具体的には、たとえば、協力や集団規範といった集団での行動や日米の文化の違いといったテーマであろう。よって、社会心理学領域の入学前学習を実施する際には、学習者が集団での行動の仕組みを学習できるよう配慮することとした。

### (2) 社会心理学と教員養成

本学部の特徴を考慮に入れると、入学前学習において、社会心理学の知識を教育者の目線に立って応用しようと思わせることも重要である。本学部は学校教員を養成するための学部である。アドミッションポリシーにおいても、求める学生像として「(1) 教職を目指す明確な意思と情熱を有し、子どもの成長に関わることに喜びを感じられる人」と教職を目指すことを明示している。社会心理学領域で

<sup>†</sup> Aiko KUBOTA\*: Educational practices in pre-admission studies for students selected by recommended admission: Report on the study support in region of the social psychology

Keywords: schooling, social psychology, pre-admission study

\* Cooperative Faculty of Education, Utsunomiya University

(連絡先: a-kubota@cc.utsunomiya-u.ac.jp)

学習する集団での行動の仕組みは、学級経営や特別活動、生徒指導や進路指導に関係する専門知である(吉田・三島・元吉, 2013) [4]。そのため、心理学の知見を学校現場に還元できる学校教員を養成するためには、入学前学習において、社会心理学で学んだ知識と学校教育とのつながりについて思考させるよう配慮することが必要と考えられる。

以上より、2019年度の社会心理学領域の入学前学習においては、①社会心理学において特徴的なテーマである集団での行動の仕組みに関する知識を学習すること、②その知識を学校教育に関連づけて考えることを合格者に求めることとした。

## 2. 社会心理学領域からの課題設定

### (1) 選定図書の特徴

課題図書の選定に際しては、先述した理由により集団での行動の仕組みに関するテーマを扱った内容という条件に加え、書籍の価格も、学生の経済面の負担を考慮し1000円以内に収まるものとの条件を加えた。そのため課題図書は、新書のうち、社会心理学の研究者が執筆した書籍の中から選定した。

その結果、2019年度の課題図書としては、山岸(1999) [5] の『安心社会から信頼社会へ：日本型システムの行方』を選定した。本書は、社会心理学領域の中でも、日米の文化差、信頼や協力といったテーマを扱っており、先に述べた集団での行動の仕組みを学習することが可能である。また、本書においては「日本人よりもアメリカ人の方が協力行動を行いやすい」という一般的な言説を反証する実験結果が紹介されている。社会心理学の研究の醍醐味の一つは、社会に意外な発見をもたらすことにある(ハスラム&スミス, 2012) [6]。そのため、本書の読解を通して、心理学が社会に対して果たす学問的貢献を暗に学ぶこともできると考えられた。さらに本書は、内容の構成として、かいつまんで様々な心理学のトピックを紹介する形式ではなく、各章に関連性があり、全体として一つのストーリーを構築する形式を採用している。そのため、読み物としても、興味深く読み進められるのではないかと期待された。

学校教育との関連に関しても、日本の学校教育で重視される協力性という集団での行動の仕組みを解明している点で、本書は有用な教材になると考えられた。本書では、日本人がなぜ協力を行うのかという行動の仕組みについて、その背景に日本人の協力

に関わる資質の高さを想定するのではなく、日本の社会的な仕組みに伴う「安心」を想定する方が妥当であることを実験結果から示している。本書によれば日本人が世界的に見ても協力的な行動をとりやすい傾向にあるのは、日本の社会的な仕組みの中に、互いに協力しているかを監視し、協力しない者に対して制裁を行う環境が整っており、それに伴い「相手が自分を搾取するような行動に出ないだろう」と確信できるから、つまり「安心」できるからだという。そのため、関係の構築されていない他者に対して協力する状況、すなわち「安心」できない状況においては、日本人はアメリカ人よりも、「信頼」(相手がひどいことをしないでだろうと期待すること)を抱くことが難しく、かえって協力的な行動を行わないことが様々な実験・調査結果から支持されている。

この知見を踏まえると、学校教育において児童生徒の協力性を育む場合、実のところ、この「協力」には、既に関係の構築された「安心」できる者への協力と、普段関わりがほとんどない他者への協力という2つの「協力」があることが想定される。そして、それぞれに対して別の心理メカニズムを想定した教育的配慮が必要であることが推察可能である。

まず、前者の協力に関しては、年度初めに、関係がさほど構築されていないクラスメイトが集まる状況下において、教員はクラス内で児童生徒が「安心」できる環境、すなわち、協力することが徒労に終わることなく自身が搾取されることもないと期待できる環境を整えることが重要と考えられる。いわゆる教師が協力的な学級風土を形成する上で行う学級経営上の工夫が、この例に該当すると推察される。

後者の協力に関しては、見知らぬ他者であっても、ひとまずは相手がひどいことをしないでだろうと期待し、協力しようとする「信頼」を育むことが重要といえる。無論、本書では、見知らぬ他者に対して、見境なく信頼することが重要だと主張しているわけではない。むしろ協力相手の情報に敏感に反応し、相手の行動を予測した上で相手を「信頼」するか、協力するかを変化させることが重要とされており、本書の後半では「信頼」に関わる心理的資質(たとえば、役割取得)に関する議論がなされている。

なお、本書では、日本社会がグローバルスタンダードな競争にさらされはじめることで、今後、安定した社会関係の中で暮らし続けることが困難になることも示唆されている(無論、本書の刊行年を考慮に

入れれば、現在の日本は既にそのような社会になっているともいえる)。この主張を加味すると、今の児童生徒が成長した際、情報革新に伴いグローバル化した競争社会を生き抜いていくためには、いかにして集団の枠を超えて人を「信頼」し協力できるかが重要であると推察される。そのため、本書を通して学校教員の立場で「安心」や「信頼」、特に「信頼」をいかに育むかを考えることは、未来の教育の在り方を考える上で重要と考えられる。

## (2) 設定した課題

上記の選定図書の内容を把握するためには、本書全体を読み込むことが望ましい。だが、今年度の入学前学習においては、各領域の課題に取り組める期間が1週間と設定されていた。そのため、合格者の負担を考慮し、課題における読書の指定範囲としては、日本人の協力に関するメカニズムを論述した第1章「安心社会と信頼社会」と第2章「安心の日本と信頼のアメリカ」のみとした。

そして、先述した本書の選定理由に関わるメッセージを伝えるため、課題に取り組む際、「読み取ってもらいたい内容、ポイントの説明」として、以下の文章を送った。

皆さんはこれまで、授業はもちろん、体育祭や文化祭に取り組んだり、部活動に取り組んだり、委員会や生徒会に所属したり…と様々な体験をされてきたことと思います。

その中でも、誰かと「協力する」ということは、日本の学校教育において特別な意味をもっているように思います。皆さんも、授業、部活動や委員会、生徒会や学校行事など、様々な場面で、お友達と協力するよう、先生から指導を受けてきたのではないのでしょうか。

世界的にみても、日本は「集団主義」などといわれて、「個人主義」である欧米と比べて、和を尊ぶ社会であるといわれることが多いように思います。こうした文化形成の一端に、日本が「協力」を重んじた学校教育を行っていることが関係しているといわれることもあります。このように考えると、学校の先生になる皆さんにとって、「協力」とその教育について深く考えることは、とても重要であるように思っています。

実のところ本書では、先に述べた“日本人は「集団主義」で協力を重んじる”という直感に反して、“日本人の協力行動は、「個人主義」の国といわれるアメリカよりも少ない”という結果が社会心理学の研究で出ていることが述べられています。一体どうし

てだと思いますか。それをうまく説明するキーワードに、「信頼（社会）」・「安心（社会）」という言葉があります。皆さんには、本書を通して、どうしてこのような結果が出てきたのかを読み解いていただき、「協力」とその教育について“深く”考えてもらいたいと思っています。

その後、論述課題として、以下の2問を設定した。

1) なぜ日本人よりもアメリカ人のほうが協力的だという結果が出てきたのでしょうか。その理由について「信頼」と「安心」という言葉を用いてA4 1枚以内で説明してください。

2) 皆さんが教員になったとき、教え子が社会に出たときに他の人と協力関係を築くことができるよう、工夫・配慮できることとは何でしょうか。①みなさんの教え子が社会に出たときに生じているであろう社会の変化(ヒント:グローバル化やソサエティ5.0)について調べた上で、②それは「信頼社会」と「安心社会」のいずれであると考えられるのか、そして、③そうした社会で協力する力を育むため、教員として工夫・配慮できることを論じてください。(アイデアが思い浮かばない人は、書籍を最後まで読むとヒントがあるかもしれません)

1) の課題は、書籍の内容について理解を行ったかを本書のキーワードを用いて説明するよう求めた課題である。2) の課題は、書籍の内容を踏まえた際、教員としてどのような工夫や配慮ができるかまで発展的に論じることを求めた課題である。2) の内容を「信頼に基づく協力を育むために教員として配慮できること」という課題にすることも考えたが、それは本書の後半まで読み通さないと解答が難しいと考えられたため、アイデアが思い浮かばない人へのヒントとして提示することとした。

## 3. 合格者の課題遂行からの分析

まず、1)の書籍の内容理解に関する課題について、「日本の協力の仕組みの背景に社会の仕組みがある」という理解を示唆した文言は、3名中2名にみられた。たとえば以下のような文である。

(回答者1)「集団主義的な行動」をとるのは、我々の心の性質に関わらず、自分ではなく全体の利益を重んじるよう行動させる社会の仕組みが存在しているからだと分かる。(※下線・太字は筆者)

もう1名は、上下の関係性を重視する傾向という独自の意見を述べており、本書の内容を理解できて

いたか確認ができなかった。1) の課題に「書籍の内容に即して」という文言を入れると課題を通して理解をはかることができたかもしれない。

1) の課題の条件とした「安心」と「信頼」というキーワードの理解については、それらの定義に関する明白な言及が、どの合格者にも見られず、キーワードを正確に理解したか定かでなかった。ただし、後述する2) の課題遂行状況から、理解が不十分である可能性が示唆された。課題提示の段階から「言葉の定義を示したうえで」と条件をつけると、キーワードの理解促進を図ることができたかもしれない。

2) ①においては、今後の社会の変化として、全員がAIなどの技術革新について言及していた。ただし、②その革新に伴い、「信頼社会」と「安心社会」のいずれになるかについては意見が分かれ、「信頼社会」になると述べたのが1名、「安心社会」になると述べたのが2名であった。だが、そのロジックとしては、「AIなどの科学技術に対する絶対的な『信頼』がなければなり得ることはできない(回答者3)」といったように、「信頼」の定義が科学への信頼にすり替わっているケースや、なぜAIの発達した社会が「安心」できる社会になるのかについて、論理的に記述されていると考え難いケースがみられた。これは先述した1) の「安心」と「信頼」の理解が不十分であったことを示唆していると考えられる。そのため、2019年度は、解説コメントにおいて、キーワードの定義も含め本書の内容を詳述し、理解促進を図った。

2) ③の学校教員として配慮できる点については、「信頼」を育むための教育に関して3名中2名が言及していた。内容としては、「普段からグループ活動で考える機会を増やし人と接する時間を作りコミュニケーションを取ることを実行したい(回答者2)」、「教員はただ勉強を教えるだけの存在ではなく、子どもたちと地域をつなげる存在にならなければならない。(中略)社会は今どうなっているのか、そしてAIなどの技術が普及してきたからこそ、人はどのように協力をして生きていくのかということを見せる機会を増やすことが大切なのではないか。(回答者3)」といった意見がみられた。

もう1名は、「協調性を身に着ける学級経営」に配慮したい旨が記載された上で、AIとの共存という観点から、「教室ではできるだけ今に近いアナログ的な雰囲気を残し、授業では会話を重要視したい。そして機械と話すのではなく人と話す際の言葉使い

を自然と学ぶことができるような環境づくりを工夫したい(回答者1)」と記述しており、本書の内容よりも2) ①に力点をおいた内容が論じられていた。

#### 4. 今回の課題の意義と今後の改善

今回の課題を通して、推薦合格者は協力という集団での行動の仕組みを学ぶ中で、教育者の立場から今後の学校教育において必要と考えられる点について考えを深めることができた。

もっとも書籍の理解については必ずしも十分といえない部分もあった。今回の合格者に対しては、3・4年生あるいは卒業時に再度同じ課題図書を読み返すことを勧めてみたい。また、来年度以降の入学前学習に際しては、課題の文言に修正を加えたり、選定する課題図書の難易度を再度検討したりすることで改善を図る必要があるだろう。

なお、本課題の教育上の意義を問うためには、合格者が入学した後の学習状況をみていく必要がある。今後は、合格者の入学後の学習状況を注視しつつ、より実りある入学前学習を追究していきたい。

#### 5. 引用文献

- [1] 唐沢かおり(編). 新・社会心理学——心と社会をつなぐ知の統合——. 北大路書房(京都), (2014).
- [2] 久保田愛子. 教育心理学教育の体系化に向けて(5)——社会・集団・感情の領域における整理と統合—— 宇都宮大学教育学部教育実践紀要, 6, 383-386, (2019).
- [3] 川原誠司・石川隆行・宮代こずゑ・久保田愛子. 推薦入試合格者への入学前学習に関する教育的実践(1)——改善に向けて—— 宇都宮大学教育学部教育実践紀要, 7 (印刷中).
- [4] 吉田俊和・三島浩路・元吉忠寛(編) 学校で役立つ社会心理学. ナカニシヤ出版(京都), (2013).
- [5] 山岸俊男. 安心社会から信頼社会へ——日本型システムの行方——. 中央公論新社(東京), (1999).
- [6] Smith, J.R. & Haslam, S.A., (Ed) Social Psychology: Revisiting the Classic Studies, SAGE (2012). 樋口匡貴・藤島喜嗣(監訳) 社会心理学再入門: ブレークスルーを生んだ12の研究, 新曜社 (2017).

令和2年4月1日 受理



Educational practices in pre-admission studies  
for students selected by recommended admission :  
Report on the study support in region  
of the social psychology

Aiko KUBOTA